

週刊 TOILET WALL PAPER

レバーを
引いたら
流れる話



カ
フ
エ
に
呼
び
出
さ
れ
て
聞
い
た
ら
帰
り
た
く
な
る
話

vol.1 緑茶の歌

吉田 ラルシャンボー

「久しぶりやな。」
文庫本から視線を上げるとルマンドの顔が見える。顎髭と銀縁の眼鏡以外、とくに変化はない。「めっちゃ集中してたな、ずっとここ立っただのに声かけるまで気付かへん。」
本当はやつが近づいてきた瞬間から気付いていた。何なら「おっ」という短い挨拶も聞こえていた。ただ直ぐに顔を上げたらルマンドを待ち侘びていたと思われそうで癪だったのだ。そのための文庫本でもある。
ルマンドと会うのは、成人式の後に行われた中学の同窓会以来だった。小学五年生の時に父親の転勤で神奈川に引っ越した。
その時、三軒先のオレンジ色の一軒家に住んでいたのが同い年のルマンドだった。特別仲が良かった記憶はないが小学校の帰り道で出会うと、なんとなく並んで歩いた。中学三年生のクラス替えで始めて同じクラスになり、「おっ、お前も二組なんだ。」と話しかけられ、「そうだね。」と答えた瞬間から同じ集団に所属することになった。
三年二組にはわかりやすい思春期ヒエラルキーが存在していた。窓際に寄りかかる、運動部の背の高く女子にも愛想が良い勝組集団。廊下で群れ、前を通る者に通行手形の代わりに野次を飛ばす茶髪やピアスの不良集団。教室の中央付近で集まる、運動部と文化部の平々凡々な中学生が属する平凡集団。そして教室の隅でまとまる、アニメやゲーム好きの帰宅部から成るオタク集団だ。オタク集団の中には二年生から同じクラスで時折ゲームの話で盛り上がる友人もいたが、たまたま最初の席が教室の中央だったことと、平凡なりのお調子者だったルマンドが話しかけてきたことによって俺の机には休み時間になると平凡集団が常に集まってきた。不良の一人に廊下で足を掛けられ転んだ事と、密かに想いを寄せていた女の子が勝組の一人と手を繋いで帰るのを見た事以外、平々凡々な日常を繰り返し、気付けば勝手に卒業していた。
同窓会で会ったルマンドは純関東産にも関わらず、関西弁で喋っていた。仲間にそれをイジられると「大阪の大学行ったらうつつももうて。イジらんといて。」と楽しそうにはしゃいでいた。
まるで関西出身じゃない芸人がテレビで披露するコッテコテのエセ関西弁だった。あの時もこの瞬間も、なぜか薄っすらと鳥肌が立つ。先週、特別に仲良くなかったルマンドから連絡が来た時、一度もメッセージのやりとりをした記憶がない俺の連絡先がまだルマンドのスマホに残っていたことにまず驚いた。

ルマンドの家族に不幸でもあったのかと慌てて出ると、「元気？来週の金曜空いてる？ちょっと話したいことがあってさ。」と言われ、安堵とともに少しイラつき、やがて何故俺に連絡してきたのかという疑問に変わった。「何？」と聞いても「いや、それは会った時に話すからさ。」の一点張りで電話で話すつもりはないらしい。来週の金曜も何もここ半年ほど俺のカレンダーは真っ白だった。半年前に仕事を辞め、それからずっと実家に寄生している。ルマンドの言う「話したいこと」が気になり、標準語で喋っていたこともあって思わず「いいよ。」と会う約束をしてしまった。

会う三日前になると、想像通り「やっぱり面倒くさい。」という気持ちが湧き上がってきた。ここ半年、最寄り駅の本屋よりも遠い所に行っていなかった。ルマンドが指定してきた店は新宿にあるカフェだった。待ち合わせ場所が居酒屋でないことも加わって最早、面倒どころか行きたくない。しかし、断りの連絡をするのも面倒だし、寄生虫の日々にも暇を持て余していた。もしかしたら新興宗教やマルチ商法の勧誘かもしれないと思えば、良い暇つぶしに聞いてみたい気もしてきた。何故か仲良くもない俺に結婚の報告でもするのなら、「おめでとう。」と言ってコーヒー一杯奢るくらいの社会生活をそろそろすべきだとも。

「僕も同じの。」とルマンドが俺のブラックコーヒーを指差す。「ブラックでよろしいですか？」と坂道系のアイドルグループに居そうな可愛い店員が聞くと、「あ、ミルクと砂糖二本も。」と広角をわざとらしく上げる。実のところ俺は甘党だ。ブラックコーヒーなんて濾したドブ水だと思う。しかし、ルマンドと会うとなると反射的にブラックを頼ってしまったのだ。中学の頃もなぜかルマンドがいる時だけ美味しそうに缶のカフェオレを飲むルマンドの横でドブ水をちびちびと啜っていた。俺はブラックが飲める。お前は飲めない。「今の子、お前が中学の時好きやった佐々木さんに似てるよな？」と意味ありげな顔を俺を見てくる。小さく鼻から息を吸い「ああ、お前よくそんなこと覚えているな。」と出来るだけ単調に答えた。

「それで、話って何？」と続けると、さも面白い話があるかの様に話し出した。「中三の時にさ、船山っていたやん？茶髪のやんちゃなやつ。」

「うん、いたかも。」
忘れはしない、廊下で俺に足を掛けてきたやつだ。「そいつがさ、国語の授業で作った川柳覚えてる？」
「せりゅう？」

するとルマンドはピンと来ていない俺を無視して続けて話し出した。「お茶のペットボトルのラベルにさ、素人の川柳載せてるやつわかる？あれの公募に出す言うて川柳書かされたやん。なんか先生が川柳ってこんなやでって川柳の作り方説明して、次の授業までに書いて来いって。」
思い出した。あのお茶のペットボトルを見るたびに、胸に小さな電流が走る感覚。「んで、船山がすぐ「でっきましたあー」言うて。」
ルマンドは船山の真似をしているらしく、悩みなど無いと言わんばかりの阿保な表情をしている。無視して「ああ。」とだけ答えると、「ちょちょちょ、今のツッコむとこやで。」と言ってくる。面倒くさいやつ。
「んで、船山が作った川柳がな、「ああ海よ ああ海よ ああ海よ」ってやつ。松尾芭蕉かって、先生も「ふざけんな」って怒って。」
今度は先生の真似はしないらしい。恐らく覚えてないのだろう。「でな、船山も結局芭蕉しか出さへんから、それ公募に出して。そんであいつ賞取って。」
芭蕉ってお前の友達か。俺は図書室で数冊の川柳の本をこっそり借りて川柳をいくつか作った。そして夕食の時に家族に見せ、満場一致で決まった川柳を翌日提出した。先生からも「情景が浮かぶ」と褒められ、ルマンドに「お前、徹夜で作ったんじゃないの？」と嘖し立てられた。「いや、さっき適当に作ったやつ。」と言いながらも内心、賞が狙えるかもしれないと本気で思っていた。結果、賞をとったのは船山がふざけて作った川柳のみで、学校ではちょっとしたニュースになった。「それをこの間、急に思い出してん。」